

# さんしゃ Zapping

Vol. 34 No. 1 (通巻 193 号)

2019 年 5 月

＜産社学会 ニュースレター＞

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsumeai.ac.jp

<http://www.ritsumeai.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

## 〔 目 次 〕

### ＜新任紹介＞

着任のご挨拶	上原 徳子	p. 2
着任のご挨拶	呉 世雄	p. 4
着任のご挨拶	加藤 潤三	p. 6
着任のご挨拶	金子 史弥	p. 8
着任のご挨拶	桜井 啓太	p. 11
着任のご挨拶	住田 翔子	p. 13
着任のご挨拶	武岡 暢	p. 15
着任のご挨拶	野原 博人	p. 18

## < 新任紹介 >

### 着任のご挨拶

うえはら のりこ  
上原 徳子



2019年4月より中国語担当教員として着任した上原徳子（うえはらのりこ）と申します。まず自己紹介をさせていただきます。生まれは秋田県大仙市（旧仙北郡協和町）で、高校卒業後、奈良女子大学文学部に進学しました。学部・大学院で中国文学を専攻し、博士後期課程在籍中、1999年9月から2年間南京大学中文系に中国政府奨学金留学生（高級進修生）として留学しました。帰国し2004年に課程博士を取得した後は、大阪に在住し非常勤講師をしておりました。2006年

に日本学術振興会特別研究員（PD）に採用され（京都府立大学文学部）、2007年に宮崎大学教育文化学部にて講師として着任いたしました。宮崎大学には12年間勤務し、全学の中国語教育と大学院修士課程日本語支援教育専修の仕事をしていました。また、宮崎にいる間に37歳と41歳で二人の娘を出産しましたが、夫は関西にいましたので、いわゆるワンオペ育児の状態でした。宮崎での12年はほとんど育児と仕事との格闘でした。支援の手厚い大学ではありましたが、自分の研究、そして校務と子育てを両立させるには多くの困難があり、論文提出締め切り日に高熱を出した娘を抱えたまま涙を流したことは忘れられません。娘たちのかわいい寝顔を見ながら、もっと自分に力があれば、と胸を締め付けられるような思いを抱く毎日でした。

このたび、縁あって立命館大学に採用され、子供たちは父親と一緒に過ごす毎日を楽しんでいます。家族が一緒になれたという意味で本当に立命館大

学には恩義を感じている次第です。

私の研究は、中国古典文学、なかでも古典小説を対象としています。ここ数年は中国近代知識人(主に 20 世紀初頭)の古典小説受容のあり方に着目しており、英語の資料も研究の対象にしています。知識人が中国の近代化にあたり古典文学をどうとらえどう体系づけたのか、それが現在にどのようにつながっているのかを明らかにしたいと考えています。そもそもいわゆる「小説」という概念自体が外来のものです。従来古典の中に単語として存在していた「小説」とは異なる西洋からの概念をどのように自分たちの文化にはめ込んでいったのか、それを明らかにすることは中国古典小説を受容してきた東アジア

諸地域にも波及する大切な問題のほ  
ずです。一方、もともとアダプテーションに興味があり、中国古典小説のリライトや映画化等に注目してきました。文学研究ですので、あくまでもテキストベースの分析ですが、現代における古典受容という広い視野から、中国古典小説を見直したいと思っています。気づけばもう若手とは呼ばれにくい年齢になってしまいました。新しい環境の中で、まずは自分のこれまでの研究をとりまとめ、その後新たな展開を考えていきたいと思っています。そして、学部にも所属する教員として、産業社会学部の学生たちに質の高い中国語教育を提供できるよう努力をしたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



## 着任のご挨拶

お せ う ん  
呉 世 雄



今年 4 月より、産業社会学部人間福祉専攻で勤務しております呉世雄と申します。授業は、老人福祉論、基礎演習、社会福祉相談援助演習、アジアの福祉研究などを担当しています。関西圏は初めてということもあり、着任前は慣れるか少し心配もしていましたが、先生方、スタッフの皆さんから先に声をかけていただいたり、またいろいろと親切に教えていただき、今は日々楽しく過ごしています。ありがとうございます。

さて、少し自己紹介をさせて頂きたいと思います。私は、韓国生まれで、初めて日本に来たのは 2004 年の夏、大学 3 年次で行った社会福祉実習の時

でした。千葉県社会福祉法人での 2 週間の実習は、振り返れば、その後の人生を変える大きなきっかけだったと思います。卒業後は大学院に進学し、インターンシップ・プログラムを通して栃木県社会福祉法人で介護の仕事をしながら研究活動を行うという貴重な機会を得ることが出来ました。日本語もままならない状態で福祉現場に入り、利用者の方や職員の皆さんにご迷惑をかけながら、いろんな失敗と触れ合いから、福祉の基本を学ぶ日々を過ごしました。その後、帰国して修士課程が終わる頃、日本への留学を決心し再び日本に戻ってきました。もう一年、現場で働いた後、2010 年に韓国政府国費留学生として法政大学大学院人間社会研究科に入学することになります。それまで現場で感じていた高齢者施設の運営課題や制度政策の影響、職員・利用者・地域社会のそれぞれの立場からみた良い経営とはなにか、という問題意識は、その後の博士論文の土台となっています。

2013 年に博士課程を卒業してからは、常磐大学(茨城県水戸市)で 3 年半、宇都宮大学(栃木県宇都宮市)

で2年半勤務しました。いずれも小さな大学でしたが、教員と学生との密接な関係のなかで教育・研究が出来たので、自分の成長につながるとも充実した6年だったと思います。研究の面では、博士論文のテーマをより広げて、地域福祉と施設経営の視点から高齢者支援を考えるとというスタンスで研究を進めてきました。具体的には、少子高齢化が進み、財政的にも厳しさが増すなか、如何に高齢者が地域で最期まで自分らしく暮らすことができるように支援するか、またそのためにソーシャルワーカーはどのような専門性を有し、アプローチすべきか、という地域を基盤としたソーシャルワークや地域包括ケアの視点から高齢者福祉の研究を行っています。少子高齢化は日本だけでなく、東アジアの国々においても共通の問題となっています。特に韓国の出生率は0.98という、世界でも前例のない低さを記録していますし、高齢化の上昇率も世界1をキープしています。そういう意味で、少子高齢化を巡る多くの社会問題、またその解決策に関するテーマは、今後とも長い付き合いになる研究課題になりそうです。

もう一つ、いま取り組んでいる研究テーマは社会的企業の日韓比較研究です。社会的企業は、社会的課題や地域ニーズを、ビジネス的手法を用いて解決することを目指す事業体のことですが、欧米諸国をはじめ多くの国で就

労・福祉・地域開発やまちづくりなどの分野で大きな成果を果たしています。この概念が日本に普及され始めたのは1990年度後半で、支援制度などはないですが、日本においてもその実践の歴史は長く、まちづくりや地域活性化、障害者の自立支援などの分野で様々な形で展開され、多くの実践的成果を蓄積してきています。一方、韓国は2007年に、アジア圏では初めて社会的企業育成法律を制定し、社会的企業を政策的に進めており、短期間で急速に成長を続けています。制度がある国とない国を比較することは、共通した分析枠組みの設定が困難なため直接比較は難しいですが、実践的先駆性を有する日本と、制度的先駆性を有する韓国、お互いの優れている要素から学び合うという手法を用いて両国の実践事例や制度政策の比較分析を行っています。

以上、私の主な研究テーマについてご紹介をさせて頂きましたが、これからも立命館大学のいろんな支援制度を活用しながら、研究へのモチベーションを落とさずに、楽しく研究活動に取り組んでいきたいと思っています。産業社会学部は学際的でいろんな専門の先生方がいらっしゃるの、社会福祉分野に限らず、多分野との切磋琢磨を通して自分自身の研究力を磨いていきたいと思っています。今後ともよろしくお願ひいたします。

## 着任のご挨拶

かとう じゅんぞう  
加藤 潤三



本年度4月より、現代社会専攻に着任いたしました加藤潤三と申します。「社会心理学」や「現代と社会」、大学院の「多変量解析Ⅰ」などを担当させていただきます。

これまでの私の経緯を書かせていただくと、関西学院大学大学院社会学研究科を修了後、大阪国際大学、琉球大学を経て、立命館大学にきました。関西に戻ってくるのは約10年ぶり、京都に戻ってくる(出身は京田辺市…洛外ですが)のは四半世紀ぶりになります。街並みや行き交う人々、路線などすっかり様変わりしており、観光都市京都のすごさを実感するとともに、自分が

「浦島太郎」状態であることに少なからず驚いています。

私の研究の中心的なテーマは、こういった「地域コミュニティ」にあります。あなたの専門は何ですかと聞かれると、いつも「地域コミュニティの社会心理学」と答えています。ただこれだと漠然としていますので、もう少しこれまでやってきた研究を詳述すると、大きく3つの流れがあります。1つは地域環境問題に関する研究であり、ここでは地域住民が自分たちの地域の環境をどのように捉えているのか、どのような要因が住民の環境配慮行動を促進・阻害させるのかといったことを検証しています。2つ目は、地域資源の開発に関する研究であり、ここでは写真を利用した調査から新たな地域資源を発見する方法であったり、地域住民のコミュニティに対する価値観から地域コミュニティの特徴を診断する方法を開発したりしています。3つ目は人の移動に関する研究であり、都市から地方への移住である地方回帰型移住における移住者の心理や、沖縄系移民のアイデンティティやネットワークなどについて検討を行っていま

す。

色々なテーマに手を出していて、「浮き草的に研究をしているのかな」と少なからず自戒の念もあるのですが、自分自身の研究のスタンスとしては、地域住民の視点から、地域の持続可能性を高め、活性化を促進させる要因を検討することを重視しています。その結果、地域コミュニティの時間的な流れの中で、その時のホットピックスに喰いついていっているのだと思います。なお、社会学でもそうですが、社会心理学では研究スタイルとして必ず実証的なアプローチをとります。上に書いたテーマを行うにあたり、様々なフィールド(兵庫県、滋賀県、沖縄県…)で、様々な調査(質問紙調査、写真調査、インタビュー調査など)を行ってきました。これま

での研究の継続性から、沖縄での研究も続けていきますが、せっかく立命館大学に来ましたので、京都を中心に新たな関西でのフィールドも開拓したいと思っています。特に現在、科研費で地方回帰型移住の研究を行っていますので、関西で実践的な取り組みを行っている地域に出かけていきたいと思っています。

産業社会学部は、テーマ豊かな先生方が多くいらっしゃいますし、地域コミュニティに興味のあるアクティブな学生諸君もたくさんいます。一緒に教育研究をできればと思っています。立命館大学での教育研究ライフを楽しみたいと思います。皆様、ご指導ご鞭撻の程よろしく願いいたします。



## 着任のご挨拶

かねこ ふみひろ  
金子 史弥



2019年4月より、産業社会学部スポーツ社会専攻でお世話になっております、金子史弥(かねこ ふみひろ)と申します。科目としては「グローバルスポーツ論」、「スポーツ産業論」、「国際セミナー」、教養科目の「スポーツと現代社会」などを担当しております。着任するまでの準備の段階から、スポーツ社会専攻の先生方はじめ多くの先生方、事務の方々には大変温かく迎えていただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

私は東京に生まれ、幼少期から大学院博士課程修了までのおよそ30年間を横浜で過ごしました。また、前任校

も関東にありましたので、私にとっては初めての関西での生活になります。環境というのはとても恐ろしいもので、周りにつられて早くも不思議な「関西弁」が時々出るようになりましたが、授業のコミュニケーションペーパーに書かれていた「先生の関東弁を聞くと故郷を思い出してなんだかほっこりします」というコメントをみて、自分のアイデンティティを再認識しているところです。それと同時に、伝統的かつ国際的な京都での生活にも大変刺激を受けています。

### 研究について

私は一橋大学、大学院で社会学を学んできました。専門はスポーツ社会学ですが、大学院時代は都市社会学や社会政策論のゼミや講義にも顔を出していました。また、博士後期課程在籍時には休学をして1年間、英国のラフバラ大学(Loughborough University)の修士課程に留学し、スポーツマネジメントの分野で修士号を取得しました。大きな研究テーマとしては「戦後の英国におけるスポーツ政策と社会統合」を掲げております。世界

各国で、また日本においても 2011 年に施行された「スポーツ基本法」の前文や 2020 年東京オリンピック・パラリンピックに関わる取り組みにみられるように、今やスポーツは「青少年の健全育成」「健康の増進」「地域の活性化」「コミュニティの統合」「ナショナリズムの高揚」「国際交流」「都市の再開発」等、さまざまな価値や役割を期待される形で「政策的に」振興されようとしています。2014 年に提出した博士論文では、近代スポーツ発祥の地である英国において、スポーツがいかなる過程を経て公共政策の「対象」となり、そして国・地方自治体レベルでどのような価値・役割と言説的に結びつけられて振興されてきたのかを、シェフィールドという都市を事例に明らかにしようとしてきました。この中では、スポーツ政策の変遷を描くだけでなく、当時の福祉国家政策、都市（地域）政策の変化を踏まえながら議論を展開しようと試みました。加えて、スポーツをめぐる「権力性」を分析するための視座として、ミシェル・フーコーの「統治性（governmentality）」論を援用しました。

博士論文提出後は、主に 2 つのテーマについて研究を進めています。ひとつは、エリートスポーツ政策（オリンピック等の国際大会での（金）メダル獲得を目指した選手の発掘・強化・育成に関わる政策）と＜ブリティッシュネス（Britishness）＞の（再）構築を目指す

取り組みの関係性に関する研究です。4 つのホーム・ネーション（イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランド）が各々代表チームを結成して参加できるサッカーやラグビーのワールドカップとは異なり、オリンピックでは原則的に「連合王国（United Kingdom）」の選手団（“Team GB”）として参加する必要があります。加えて、その選手団には多民族社会である現代の英国を反映して、多くのエスニック・マイノリティが含まれます。スコットランドの独立問題や EU 離脱の問題に揺れる英国において、スポーツ（より具体的にはオリンピックでの英国人選手の活躍）が、連合王国としてのナショナル・アイデンティティ（＝＜ブリティッシュネス＞）の（再）構築に向けた動き、あるいはメディアにおける＜ブリティッシュネス＞をめぐる言説・表象とどのように結びつけられようとしているのかを描き出したいと考えています。もうひとつは 2012 年ロンドンオリンピックの＜レガシー（legacy）＞に関する研究です。特に、オリンピックの開催が英国の競技団体の選手育成・強化戦略やガバナンスに与えた影響、開催都市であるロンドンの地域のスポーツ環境に与えた影響を政策文書の分析や関係者へのインタビュー調査を通じて明らかにしようとしています。

## 教育について

これまで常勤、非常勤の形で、スポ

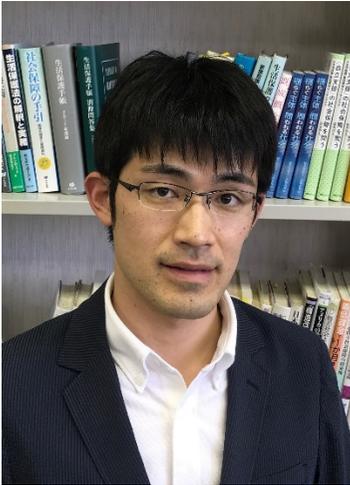
ーツ社会学やスポーツ政策、スポーツマネジメントに関わる講義を担当してきました。前任校の筑波大学では、体育系という体育・スポーツ科学を教育・研究する組織に所属しておりました。主な職務は、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて日本政府が推進するスポーツを通じた国際貢献事業「スポーツ・フォー・トゥモロー (Sport for Tomorrow)」の一環として筑波大学内に設置された、「つくば国際スポーツアカデミー (Tsukuba International Academy for Sport Studies: TIAS)」という主に留学生を対象とした修士プログラムの運営および TIAS での教育・研究でした。具体的にはスポーツマネジメントに関わる英語での講義と修士論文指導に携わっておりました。在籍した4年間では主指導教員として12カ国(日本、韓国、中華人民共和国、台湾、インドネシア、ポルトガル、ギリシャ、ロシア、ブラジル、ルワンダ、タンザニア、サモア)14名のまさしく多様な学生を指導する機会に恵まれました。また、プロ

グラムの関係で国内外のスポーツイベント(2016年リオデジャネイロオリンピック、2018年平昌オリンピック含む)やスポーツに関する国際会議に参加することができました。さらに、国際性豊かな同僚にも恵まれました。この中で強く感じたことは、話す言葉や宗教、文化、国や出自が違って、スポーツが好きなもの「同士」、スポーツに関わっているもの「同士」、さらにはスポーツについて学ぶ(研究する)「同志」として多様な人々とつながることが出来るということです。

この度、さまざまな「ご縁」があって、産業社会学部のスポーツ社会専攻で働く機会をいただきました。社会学部の中でスポーツに関する教育、研究に携われることに感謝しながら、国際都市である京都という地で、これまで培ってきた経験を立命館大学の学生に伝えていけたらと思います。精一杯頑張りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします！

## 着任のご挨拶

さくらい けいた  
桜井 啓太



2019年4月より産業社会学部人間福祉専攻に着任しました桜井啓太と申します。「公的扶助論」を主担当に、今年度は「社会福祉調査論」や小集団科目を担当しています。

生まれも育ちも大阪で、大阪大学(人間科学科)を2002年に卒業し、大阪の堺市役所に社会福祉職の公務員として入庁。生活保護のケースワーカーとして10年間仕事をしていました。その間に社会人大学院生として、大阪市立大学大学院創造都市研究科に修士課程、博士課程と進み、2015年に学位を取得しました。その後、2017年に堺市役所を退職し、名古屋

市立大学で教員として仕事をしました。

教員としての経験は3年にも満たず、まだまだ学ばなければならないことだらけですが、どうぞよろしく願いいたします。

専門は日本の貧困や社会的排除、貧困を対象とした社会福祉制度(生活保護)を中心に研究しています。特に大学卒業後、10年間仕事に就いていた生活保護ケースワーカーの経験は、それまでいわゆる中流家庭で育った私にとっては毎日おどろきの連続でした。現代日本における貧困や低所得状況に置かれた人びとの生活を実感として得るだけでなく、それに対する公的扶助制度の機能不全の現状にも衝撃を受けました。

それゆえに研究も仕事上で制度の壁にぶつかった経験を元に着想を得たものが多くなっています。いくつか挙げますと、①就労により生活保護から脱却した元生活保護世帯の実態調査研究や、②最低賃金と生活保護基準との関係、③生活保護世帯の大学生の生活実態などの実証研究をこれまで行ってきました。根底にある問題意

識として、社会福祉の昨今の基盤理念の一つである「自立支援」という概念に“うさんくささ”を感じており、「自立支援」概念（≒ワークフェア概念）の言説分析を博士論文では取り上げました。その点で障害学の自立生活運動や、フェミニズムのケアや依存の再評価にも大変興味があります。

最近では、生活保護の申請抑制（いわゆる水際作戦）の地域格差の可視化や要因分析に手をつけ始めつつ、一方では、自立（支援）ではなく、人間の“根源的依存性”を基盤にした社会福

祉の在り方みたいなものを妄想しながら、“依存”（依存の病理化）について調べています。

産業社会学部には様々な研究分野の先生がおられ、学生・院生の方々の研究も興味深い研究が多数あります。このような刺激の多い職場に着任できたことを感謝し、自分自身一刻も早く貢献できるよう教育・研究の研鑽に励む所存です。先生方にはどうぞご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。以上、簡単ではございますが着任のご挨拶とさせていただきます。



## 着任のご挨拶

すみだ しょうこ  
住田 翔子



2019年4月より産業社会学部メディア社会専攻に着任しました住田翔子(すみだしょうこ)です。今年度は、「表象文化論」「基礎演習」「プロジェクト・スタディ」「現代とメディア」などを担当しています。学部生、院生、そして非常勤講師として、これまでの人生の半分以上を京都と立命館大学で過ごしてきた私にとって、出身校・学部で教鞭をとることは緊張感があるもののやはり嬉しいことであり、これまで以上に力を入れて研究・教育に取り組んでいこうと思っています。

まず研究に関して述べるならば、学部・大学院ともに研究テーマは「19世紀後期フランスに生きた画家ポール・

ゴーギャンにとって nostalgia がいかにその人生と作品制作に作用したか」というものでした。2000年代の学部在学時、日本において昭和に対する回顧ブームが起こりつつあったこともあり、nostalgia が私たち人間や社会にとってどのような効果をもつのかに関心を持ちました。とはいえ、知識も経験もなくどうすればその問いを解けるのかに悩んでいたところ、ゼミの指導教授である仲間裕子先生にポール・ゴーギャンという研究対象を与えていただいたのでした。ゴーギャンはフランスの首都パリを離れ、まずフランス北西部のブルターニュ地方へ、後に南洋のフランス領タヒチへと移動しつつ絵画制作を行います。その移動と制作過程には過去に対する憧憬を認めることができます。以来、博士論文提出までゴーギャンを起点にしながら nostalgia 研究を進めてきました。研究手法は作品や手紙などの資料分析が中心でしたが、鹿島美術財団の研究助成を得てフランス・ブルターニュ地方での実地調査も行いました。かつてゴーギャンが過ごした土地を訪れ、見たであろう風景を追体験でき

たことは、その後の研究の方向性を考える上でも良い経験でした。2011年博士学位取得後は、日本における廃墟の表象を新たな研究対象として nostalgia の個人的かつ社会的な意味機能の研究を継続しています。私自身、あの頃は良かったなどとはさほど感じない一方で、古びた建築物や事物に快さを感じます。そしてそれが個人的な趣味嗜好に留まらないことを示すように、1980年代以降の日本では廃墟を始めとする過去を表象するかにみえるイメージが映像メディア、印刷メディアを中心に回り出し、2000年代になると廃墟を実際に探索し歩き回る廃墟愛好家の姿も目立ち始めます。近年はさらに廃墟の遺産化も生じています。このような廃墟に対する熱いまなざしと nostalgia との関わりを考えるべく、現在研究を進めています。

次に教育面では、これまで立命館大学、京都造形芸術大学、愛知学院大学などで多様な授業科目の非常勤講師を務めてきました。立命館大学では小集団科目の「プロジェクト・スタディ」に携わせていただき、今年度も引き続き担当します。京都造形芸術大学では、作品制作を行う大学院生による自身の制作物評価レポートを添削す

るという、芸術大学特有の教育の一端に関わらせていただきました。毎回提出されるレポートにおいて、院生の方々が日々どのような環境かつ目的でどういった作品を制作しているのかを垣間見ることができ、アーティストなど表現者の内実に触れられる貴重な機会でした。また、出身が愛知ということでも縁のあった愛知学院大学では「社会学」を担当し、「社会学」と名乗りながらもその実メディア文化という非常に偏った内容を好き勝手に講義させていただきました。もともと学びたい、研究したいとこの道を選んだわけですが、学ぶ瞬間は研究だけでなく教育の場面にもあることを、このような講師経験を積む中で実感しました。今後は産業社会学部で授業のみならず広く教学全般に関わらせていただきますが、教え学ぶという姿勢を忘れず、学生のみなさんが充実した大学生活を送れるようサポートしていきたいと思います。

最後になりましたが、メディア社会専攻を初めとする多くの先生方ならびに職員のみなさまにはとても暖かく迎え入れていただき、心から感謝申し上げます。今後ともご指導・ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願いいたします。

## 着任のご挨拶

たけおか とおる  
武岡 暢



4月から現代社会専攻に着任しました、武岡です。どうぞよろしくお願いいたします。すでにいくつかの場面で自己紹介をしておりますので、それらとこの原稿とで重複が出てくるかと思いますがご容赦下さい。

私はこれまで主として新宿歌舞伎町でのフィールドワークに基づいた研究を行ってきました。と言ってもこれは大学院に進学してからの話で、卒業論文ではエスノメソドロジー、具体的には「認知症高齢者の会話分析」をしました。繰り返し認知症高齢者同士の会話を聞くなかで、「大学院ではあまりミクロなことではなく、かといってマクロなことでもない、メゾレベルの研究をしたいなあ」という気持ちが強まり、都市社会学を選

びました。メゾレベルという意味では産業社会学や労働社会学も魅力的だったので、さいきん都市社会学と労働社会学のあいだの関連に関する研究を始めたのもこのとき以来の因縁かも知れません。

ところが都市社会学をやると決めて大学院に入れてもらったのはいいものの、具体的な素材として何を取り上げるのかが決まったのは、M1の12月のことでした。1年後には修士論文を提出しなければならない時期になってはじめてテーマが決まったということもあって、M2のときに提出した修士論文は落第してしまい、修士課程を修了するのに3年かかりました。この経験もあって、いまだに修士課程の学生さんたちには満腔のシンパシーを覚えます。私の通っていた中学では海浜学校で遠泳をするのですが、2日目に泳いだ10kmよりも1日目に泳いだ2kmの方がはるかに大変だった、という経験が印象に残っています。慣れてしまえば10kmを泳ぐことはさして大変ではありませんが、初めて海で長距離を泳ぐとき、プールと違ってあまり水が口や目に入らないよう

に気をつけなければすぐに体力を消耗してしまいます。修士論文の執筆も少し似ていて、レポートを書くのと長い分量の学位論文を書くのではわけが違う、ということを感じ知らされました。

ともあれ何とか書き上げた修論ですが、歌舞伎町の中でも地権者や自治体、警察といった比較的フォーマルな主体に対する調査しかできておらず、そうしたフォーマルな諸主体にとっても関心の焦点となる、肝心の風俗産業については修士論文ではほとんど調査できていませんでした。そこで博士論文では風俗産業の各種店舗や、客引きやスカウトといった関連する職業についても調査を行うことで、この穴を埋めようと試みました。

この企図は部分的に成功し、部分的には失敗しました。調査に成功した対象と、けっきょく最後まで調査できなかった対象があります。ともあれ歌舞伎町の地域社会構造に関する図柄を描き出すために最低限必要な範囲での幅広い対象者に調査することができたと自負しています。特に客引きやスカウトといった、そもそも普段行っている活動が「違法」な人びとや、ヘルスやソープなどの性的サービスを提供する業態への調査は困難を極めたので、最終的にインタビューまでこぎ着けたときには胸をなで下ろしました。

歌舞伎町の研究をしている、と自己紹介をするとフィールド調査の側面に

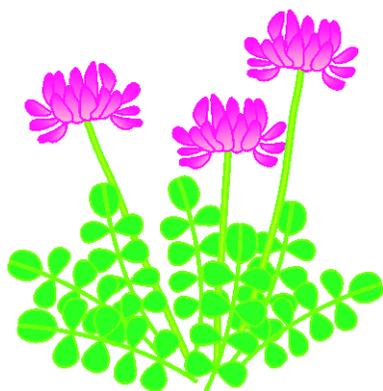
ばかり注目されてしまいますが、自分としては理論的な検討についても自負を持っています。社会学でかなり融通無碍に用いられてしまっている「(地域)コミュニティ」概念について、実は無視できない論点先取がすでにその用法のうちには含み込まれてしまっている点を指摘し、代替案としてより内容自由な「地域社会」概念を用いることを提案しました。この辺りは自分で読み返してもいまだに一番面白く読めるところですので、皆様もぜひ拙著『生き延びる都市』（新曜社）をお読み頂ければ幸いです。

歌舞伎町の研究の後には「どこを」研究するのですか？というのも本当に頻繁に質問されることのひとつですが、今のところの考えでは現代の特定の地域を取り上げる予定はありません。興味を持っているのは1950年代前後の社会調査です。歌舞伎町という地域においては「(地域)コミュニティ」の研究がほとんど常に依拠してきた「住民」というカテゴリーがあまり前景化しておらず、その代わりに様々な活動に携わる職業的なカテゴリーが重要な役割を果たしていました。そのため、「(地域)コミュニティ」概念の代替として提案した「地域社会」概念においても、「居住」にこだわるのではなく、多様な「活動」の再生産構造として地域社会を把握していくことを主張しました。

このことから、産業社会学や労働社会学といった分野にはじまり、さまざま

な社会科学の領域で用いられている「職業 occupation」やそれに類する諸概念(work や job など含まれるかと思えます)に現在では関心を持っています。産業社会学部、というだけあって産業や労働を専門とされている先生

方の層がとても厚いようにお見受けしておりますので、私がいま興味を持っている「職業的な活動から地域社会を記述する可能性」についても是非いろいろ勉強させていただければと思っています。



## 着任のご挨拶

の は ら ひ ろ ひ と  
野原 博人



2019 年度4月より、産業社会学部 子ども社会専攻に着任いたしました。野原博人(のはらひろひと)と申します。「初等理科教育法」、「初等理科」などを担当させていただきます。皆さまからあたたかくお迎えいただき、心より感謝申し上げます。

2019年3月まで、神奈川県川崎市立小学校で教員をしていました。小学校教員として勤めた21年間、理科教育を中心として実践力を高めていくことに努めてきました。目の前の子どもたちと夢中になって学んだり遊んだりしながら、教員としてさらに自らに磨きをかけ

ていきたいという思いで、教壇に立ち続けてきました。切磋琢磨する同僚、時には厳しく時には優しくご指導いただいた上司、温かく見守ってくださった保護者や地域の皆さまに支えられ、とても恵まれた小学校の教員生活を送ることができました。

小学校の教員として採用された頃は、将来大学で勤務することなど、予想していなかったことです。もっともっと…と教職を突き詰めていこうという思いから、小学校教員を務めながら修士、博士と続けて学位を取得する機会をいただきました。職務と研究の両立を図るのは大変困難なことでありましたが、多大なるご支援をいただいた指導教員の先生方との出会いがなければ、成し遂げることはできませんでした。これまで関わってきた皆さまへの感謝の思いを忘れず、そして、本学部に関わって皆さまとのこれからの出会いを大切にしていきたいと思っています。

この4月から本学教職課程に携わることになりました。小学校教員としての経験を活かしながら、これからの学校教育を担う教員養成を軸とした本学に

おける高等教育に力を注いでいきたいと考えています。また、今後の学校教育現場では、理論と実践の往還の実現がますます必要になってくるかと思えます。私は学校現場を離れてしまいましたが、これから本学にて研究職として努めていく中で、これまでと同様に「現場」を大切にしたい研究活動にも勤んでいきたいと考えています。

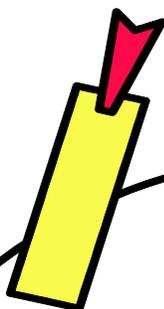
私の専門分野は理科教育学になります。理科授業における科学概念の構築過程での教授-学習の内実について教育心理学を基盤として分析し、これから求められていく学力の形成に向けた理科授業デザインを明らかにしていくことを研究の基軸としています。また、特別支援教育の視点を教科教育に取り入れる授業のユニバーサルデザインと関連づけながら、科学概念構築に向けた子どもの思考・表現の様態について、認知的な側面から分析することも行なっています。

4月からはじまった「初等理科教育法」の講義では、食塩が水に溶けていく様子や回路に流れる電流についてなど、子どもが実際に表した自然事象についての描画や記述などを示し、道具の在り方、教師の介入や対話を促進する方略等、子どもの思考・表現の内実や学習環境、教授-学習方略などを取り上げながら進めています。受講生から「子どもの表現がすごい」「想像力が豊かすぎて興味深い」といったリア

クションがあると、とても嬉しくなっています。子どもの自然事象に対する素朴な見方、考え方を教師がいかにか科学概念へ誘っていくか、小学校で理科授業をしていた頃の私が一番力を注ぎ、そして楽しんでいたことです。講義や演習を通して、教えることのむずしさや子どもと共に学ぶ楽しさを学生と共有していけたらと思っています。

最後となりますが、職種が変わり、環境も変わり、生まれも育ちも神奈川である私が京都の雰囲気になれるまで戸惑うこと多々ある中で、子ども社会専攻をはじめとする産業社会学部の先生方、共同研究室や学部事務室の職員の皆さまには、いつも気をかけてくださり、手を差し伸べていただいております。この場を借りて、深く感謝申し上げます。皆さまからのご指導、ご鞭撻をいただきつつ、少しでも貢献できるよう、より一層精進していきたいと思っております。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

# Zapping 原稿募集



研究会・学会報告の他、留学記、課外活動報告などあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。

また、いろんな特集も組んでいきたいと思っています。何本かまとめてのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字～2,000字程度でお書きください。

原稿は [s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp](mailto:s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp) に送付してください。